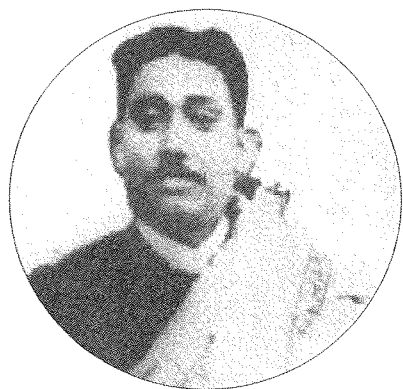


第三章
ラス・ビハリ・ボースと日本



頭山満、ビハリ・ボース、そしてタゴール

本章で取り上げる、ラス・ビハリ・ボースは、一八八六年五月、ベンガル州のブルドワ
ン地方のスパルダハという村で生まれ、青年期よりイギリスによる植民地支配に対する抵
抗運動に参加した。ビハリ・ボースによれば、前章でも触れた、イギリスによるベンガル
州分割こそが、抵抗運動をインド独立革命に向けて大きく動かした事件だった。

二〇歳のとき、両親の希望もあり、森林科学研究所に勤めたが、ここで覚えた科学技術
によって、ビハリ・ボースは爆弾製造の技術を身につけることになった。ビハリ・ボース
はその技術を活用して、インド総督暗殺未遂事件にも関係し、民衆に決起を呼びかけるな
どの激しい闘いを展開、ついにイギリス当局からはテロリストとして懸賞金つきで指名手
配され、地下に潜行することになる。

そして一九一五年、当時、日本がノーベル文学賞を受賞したタゴール招聘の準備を進めて
いることから、タゴールの親戚だと自称して日本への亡命を果たすことを計画した。ビハリ・
ボースはタゴールの親戚、プリヨナート・タゴール名義の旅券を偽造し日本を目指した。

ビハリ・ボースは一九四二年に書いた自叙伝『独立の闘争』の中で、その時の模様を次
のように記している。

※原文は旧仮名遣いだが引用の際新仮名遣いに改めた。また、漢字は新字に改めたが、それ以外の漢字や送り
仮名は原文ママとした。以後の引用もこれに準ずる。なお、本書を含む引用書籍の一部は国会図書館のイン
ターネット・サービスで読むことができる。貴重な資料として読者の皆様にもぜひ一読をお勧めする。

私が亡命した船は、忘れもしない、日本郵船の讃岐丸だった。出帆の当日私は同志
に送られてカルカッタの波止場へ行った。

(中略) 同志の眼には、涙の露が光っていた。私もこれで、祖国の山河ともしばしの
別れ、生死を誓った同志とも、しばしの別れか——と思えば万感交々胸に迫って、眼
がしらが熱くなつて来るのを覚えた。

私はあたりを憚りながら、隠していた二挺の拳(銃)をそっと取り出した。それを、
人眼につかないように、同志の手に渡して、

「たった二挺の拳銃だけれど、武器の不足に悩むわが党にとっては貴重な武器だ。亡
命する僕には不用だから置いて行く。諸君が使ってくれ給え」



ラス・ビハリ・ボース

このことをタゴール自身が知っていたかどうかはわからないし、今後も資料などで証明することはできないだろう。しかし、タゴールの全く知らないところでこのような偽装工作が行われたとも思えないし、タゴールは一九二四年、一九二九年の二度の来日の際には

ビハリ・ボースと日本で会見している。

特に重要なのは、一九二四年、タゴールがビハリ・ボースを介して、玄洋社の創立者であり偉大なアジア主義者、頭山満翁と会っていることである。

九月一二日、上野精養軒でタゴール歓迎の盛大なパーティが開かれ、頭山満も出席、タゴールはインド式に両手を合わせ、翁は日本式に深々とお辞儀を

(中略) 船会社が盛んに荷物を積み込んでいる。三等船客の印度人が四、五名革命党員の嫌疑で警官に拘引されて行く。自分の身もどうなることやら……。

嚴重な客船調査は三等船客から二等船客へ——次第に私の身辺に迫ってくる。実に不安な嫌な気持ちである。針を踏まされているようだ。私は一等船客として乗り込んでいたのであるが、私の他に一等船客は日本人が一名、猶太(ユダヤ)人が一名、印度人の商人が一名の合計四名だけであった。焦燥と不安のひとつとき、私はまた例によって、煙草をくわえて、港の街を眺め平然さを装った。

「このほかに一等船客はまだいるのかね」

と訊ねる英人警官の声が聞える。離れていても私の耳はひどく緊張していて、警官の質問する一語一句、その態度のちょっとした変化も見逃さない。

事務長がそれに答えて、

「ええ、もう一人タゴールさんの親戚の方というのが乗船しています」

「ああ、そうか。それではよろしい」

警官は、タゴールの親戚に化けた私を調べずに、そのまま行ってしまった。

「有難い。しめたッ」

思わず叫んだ。

ラス・ビハリ・ボース著『独立の闘争』昭和書房

して挨拶を交わした。通訳はビハリ・ボース自身が務めている。この時タゴールは次のように語った。

「私が前回約八年前に日本を訪れた時、私はあなた方の将来を心配していました。私は大規模で表面的な（西欧への）模倣や、精神性の不足について懸念していました。今日では全く違っています。あなた方は精神のあり方を発展させ、私は非常に喜びを感じております」

そして、もっと多くのインドの哲人を自分たち日本に紹介してほしい、という司会者の言葉に関しては、それよりも「あなた方は、ご自分たちの間に賢人をお持ちであり、西洋賞賛をした過去において無視したように、彼らを見捨ててはいけません」と答えている。

ここでのタゴールの言葉は、明らかに、ビハリ・ボースを助け、受け入れて、彼のインド独立運動を支持していた日本の志士たちに向けられたものだろう。そして続く一九二九年の来日では、頭山満翁はちょうど中国におり、タゴールと会うことはできなかったが、タゴールは帰途、翁あてに短い手紙を残している。

「親愛なる友人へ

私は、日本を去る寸前です。

別れの言葉を残していきたいと思えます。

あなたの使命は、素晴らしい理想のために努力をすることです。

私が計り知れない喜びを感じながら、インドから日本へ、ヒューマニズムにおける人類同胞の思想を広める私の使命とあなたの使命は、完全に一致しています。

私は、この気持ちを伝えたいと思えます。」（一九二九年七月八日）

我妻和男著『タゴールの世界』第三文明社

タゴールがこれほどまでに共感し「ヒューマニズムにおける人類同胞の思想」を自分と共有していると語った頭山満翁とビハリ・ボースの出会いもまた、日本とベンガルの関係における歴史的な大事件であった。

ビハリ・ポースと中村屋

ビハリ・ポースが日本に亡命しても、イギリスの追っ手はあきらめなかった。またポースも、日本での活動を控えることなく、東京麻布に潜伏しつつ、日本在住のインド運動家たちと交流した。また、この時期に日本に同じく亡命していた孫文とも親しく交流し、意見を交わしている。さらに、もともと日本亡命の目的の一つであった武器の密輸にも取り組んでいる。イギリスがビハリ・ポースの日本潜伏を知るのに時間はかからなかった。

とくにイギリスを刺激したのは、一九一五年一月二七日、上野精養軒で行われた在日インド人会主催による大正天皇ご即位祝賀会のことだった。日印交流を兼ねて行われた祝賀会では、日章旗が掲げられ「君が代」は斉唱されたが、イギリス国歌は流れず、またユニオン・ジャックも掲げられなかった。当時インドはイギリス統治下であり、またイギリス公使も招待されていないが、この扱いは、在日インド人たちの明確な植民地統治への抗議の意を示していた。イギリス当局は、ビハリ・ポースがこの態度に関わっていると判断したのである。ついにイギリスは、ビハリ・ポースはドイツのスパイとして行動してい

るという容疑から、日本政府に引き渡しを求めた。

翌日の一月二八日、ビハリ・ポースは警察署に呼び出され、五日以内の国外退去を命じられる。ふたたび日本を出れば、そのままイギリスに引き渡され、処刑される可能性が大であった。また、同じく亡命していたインド人活動家、ヘレンボ・ラル・グプタにも同様の命令が出ていた。二人は新聞社にこのことを訴え、ともに、頭山満翁らにも面会して救援を求めた。新聞社は早速このことを大きく報じ、日本を頼ってきたインドの志士を引き渡すとは国辱だという声が国民の間でも強く上がった。頭山満翁も尽力を約束した。

この時、新宿で店を構えていた中村屋の相馬愛蔵とその妻・黒光も、日本政府の弱腰に胸を痛めていた日本国民の一人だった。愛蔵はこの件について「誰かわきから出て隠してしまえばいいんですな。私のところなんか年中ごたごたしているから、かえっていいのかもしれないですね」と、あるとき、頭山翁周辺のジャーナリスト中村粥に口にしていた。

何の気なしの一言だったようなのだが、これは良いアイデアと思われた。仮にビハリ・ポースを頭山満や玄洋社系の家や関係者の所にかくまっても、警察はすぐに見つけ出してしまおうだろう。すでに「中村屋サロン」と言われる画家や芸術家の集まる有名店で、アト

リエも有していた中村屋だが、政治に直接かわっているわけではない。また、黒光は英語も通じる。ビハリ・ボースらをしばしくまうとしたらこの店が格好と頭山たちは判断した。相馬愛蔵も急の連絡を受けたが、妻と共に引き受けることを覚悟した。

一二月一日、頭山家でビハリ・ボース、グプタ兩名の別れの宴を張るという名目で二人を呼び寄せると、孫文の支援者でもあった宮崎滔天が英語で「君たちを隠すことにしたよ。秘密でやるからそのつもりで」と告げた。

頭山満夫妻、内田良平、寺尾亨、葛生能久、宮崎滔天、佃信夫、相馬愛蔵ら、当時の頭山周辺の大物が宴会に集結し、ビハリ・ボースとグプタをひそかに裏口から逃して、当時はまだ珍しかった自家用車に乗せ（玄洋社の杉山茂丸がアメリカから購入した最新車で、そのスピードには誰も追いつけないことから、用意されていた）新宿の中村屋に急行、相馬黒光は英語で事情を二人に説明し、六畳と四畳半のアトリエにかくまった。頭山家の門の前で見張っていた警察官の目をかいくぐった脱出劇だった。

ビハリ・ボースとグプタをかくまうときの決意を、相馬黒光は次のように語っている。

とにかくこのインド人を匿かくったということは、政府がしないことをこちらがあえてしたのであるから、発覚すれば問題は大きい。われわれは何らかの処置に服さねばならないだろう。その時は責任者として私が出よう。なぜと行って、二人を匿かくう部屋のこと、食事のこと、その他いっさい身辺をわきまえるのは主婦なのだから、それに私が囚こえられて家にいなくなっても、子供たちを世話してくれる人はあるし、商売は本郷以来私の名義のまま、それはちょうど私が勝手な振舞をできるといふ証拠にもなる。相馬は「どうも家内が出過ぎたことをして」そう言っていればすむ。そうすれば商売にも影響はない。

相馬黒光著『ラス・ビハリ・ボース覚書』（筑摩書房『アジア主義』より）

夫の相馬愛蔵も、断固としてボースを護る決意を持ち、当時の中村屋の店員三〇人に協力を求めた。はるばるインドを脱出して日本に一身を託した亡命者を、たとえ政府が見捨てようとも、我々は断固保護する、と説く愛蔵に対し、店員たちも、このことはたとえ父母兄弟にも他言しない、万が一警察に踏み込まれたら、実力でも彼らを護る、と意気込んだ。相馬

愛蔵は、そのような事態だけは避けねばならない、しかし万が一の時はお前たちが扉を断固として開けるな、その間に裏から逃がすからと落ち着かせた上で、とにかく、彼らをかくまっ
ているという情報を決して外には出さないことを嚴重に守ってくれと店員たちを諭した。

もしも大切の預り人をわれらが護りおおせなくて、むざむざ死地におとすことが
あつたら、中村屋の恥はもとより日本人の面目が立たない。どこまでも血気の勇はつ
つしんで保護のまことをつくしてくれ。相馬のこの心持が通じたときみえ「わかりまし
た、慎重にやります」とみな落着いて誓ってくれた。

相馬黒光著『ラス・ビハリ・ボース覚書』（筑摩書房『アジア主義』より）

英語が通じるのは相馬黒光だけだったのだが、女主人が店に出ずに二人の面倒を見てい
るばかりでは逆に怪しまれる（当時の中村屋は、日本ではじめてのクリームパンを発売し
好評を博していたが、まだ小規模な店で相馬夫婦もしばしば店に出ていた）。伝達はメモ
の手渡しを中心となり、直接の世話は二人の女中に任されることになった。そのことで、

相馬黒光は次のような感動的なエピソードを書き残している。

その女中の伯父さんが死んだというしらせなのに、お葬式の日だけでも帰してやれな
かった。私が押えるまでもなく女中の方で「私は洩らしませんけれど、もしうっかり
して変に感づかれるようなことがあつてはなりませんから、家へは心配がなくなつた
後で行かせていただきます」と言つて辞退してくれたのであつた。この女中はおまき
さんといつて忘れられない人の一人である。

相馬黒光著『ラス・ビハリ・ボース覚書』（筑摩書房『アジア主義』より）

しかし、入浴もできず、狭い部屋から外に出ることもできない生活の苦痛から、グプタ
は耐えきれなくなり脱走、大川周明のもとで保護を受ける。その後、グプタは大川に当時
の段階でのさまざまな情報を提供した後、運動から姿を消すが、秘密裏に独立運動に参加
したという説も残されている。

相馬俊子との結婚

しかしその間も、頭山満翁ほか、ビハリ・ボース支援者は日本政府と交渉を重ね、一九一六年春、石井菊次郎外務大臣からビハリ・ボースを保護するという確約を得た。そしてビハリ・ボースは中村屋を出ることができ、三月一五日、麻布の一軒家に、今度は日本の警察が世話をして入居することになった。ビハリ・ボースは頭山満、犬養毅など、世話になった人びとを招いてお礼の会を開き、自らインドカーリを調理してふるまった。

この場でビハリ・ボースは、見事な日本語でスピーチをして人々に感銘を与えた。中村屋にいる間も時間を無駄にせず日本語を学び、しかも言葉遣いや敬語にも気を配り、各社会層での言葉遣いの違いを徹底的に学んでいた。後にビハリ・ボースが日本でさまざまな論文を発表し、また、演説会場では日本語でインドの現状を訴える素地は、この時点ででき上がっていた。もう一つの運命的な出会いは、相馬夫妻がボースのお手伝いをさせようと、この日、娘の俊子を連れてきたことだった。

だが、日本は保護に方針を切り替えたとはいえ、イギリスにとつてビハリ・ボースは未だに逮捕すべきテロリストである。探偵が彼の居所を嗅ぎまわり、ビハリ・ボースは何度も住居を変えるなどして行方をくらませねばならなかった。このため、どうしてもビハリ・ボースの身の回りには、昼夜を分かたず彼を見守り、また彼のために動ける信頼できる人が必要だと、頭山満翁は、俊子をビハリ・ボースの妻にしてはどうかと申し出た。

相馬黒光は、正直、自分たち夫婦がビハリ・ボースをかくまったことで、娘に途方もない運命を背負わせたのではないかと悩みにくれた。もしかしたら、娘にこの話を伝えたら、両親や頭山満翁ほか多くの人たちがビハリ・ボースを守ってきたことを見ているのだから、本音はいやでも、断れないところに追い詰めてしまうかもしれない。黒光はできるだけ丁寧に「お前もよくよく考えなさい、事態が切迫しているからといって返事を急いではならない。これは普通の御嫁入とは違うのだから」と、この申し出を伝えた。

しかし俊子は表情も変えることなくこの言葉を受け止め、二週間ほどして返事を聞くと「行かしてください、私の心は決まっております」と答えた。

「お前、よく考えたのですか。いのちがけ（のこと）ですよ」

「知っております。お父さんお母さんの心持もよくわかっています」

この会話ののち、相馬黒光は、今度はビハリ・ボースを訪ねた。ビハリ・ボースの自叙伝によれば、以下のような会話ののち、二人の結婚は決まったのだった。

「あなたも、これから先の長い生活に一人では御不自由でしょうし、第一、あなたの身の安全をはかるには、結婚することが必要です。結婚の相手として、そう申すとおかしいですが、日本であなただをいちばん理解している娘として、私の娘俊子をお嫁に貰っていただきたいのです。」

このことは、頭山先生も、ぜひ、そうすることがよいと申されているのです。あなたの率直な考えを聞かせて下さい。それに、あなたのお国は、早婚の国だということも伺っていますし、結婚していらなくても、相思の女性があるとか、そう云うこともあつたら、隠さず打ち明けて下さい」

聞かされた私は、

「いかにも、私の国は早婚です。しかし、私は、少年時代から革命に身を投じて、東奔西走、席のあたたまる暇もなく、親兄弟にわずらいの及ぶことを恐れて、生れた家

にさえ近づいたことはないのです。まして、結婚などのことは、考えたこともありません。自分は印度の独立を終生の事業とし、妻として一生を捧げるつもりでありませぬ。妻を持つなどと思いません。」

しかし、俊子さんのような立派な方を私に下さるというお話、大恩ある頭山先生のおすすめと云い、喜んでお嫁に貰いたいと思います」

ラス・ビハリ・ボース著『独立の闘争』昭和書房

まだビハリ・ボースの身は安全とは言えず、仮に親戚に知らせれば必ず反対され情報も漏れることを懸念して、結婚式は相馬夫婦がすべてを取り仕切り、一九一八年七月九日、頭山満の家にて行われた。

一九一八年十一月、第一次世界大戦がドイツの降伏によって終わった。もともとイギリスがビハリ・ボースを逮捕するための理由は、ドイツに協力するスパイとしての疑いであり、ドイツ敗戦とワイマール共和国樹立によって、その原因は自動的に除去された。イギリスのビハリ・ボースへの追跡も弱まり、一九二〇年、ビハリ・ボース夫婦の間には長男

の正秀が、二二年には長女の哲子が生まれている。二三年にはビハリ・ボースは日本に帰化し、ほぼ身の安全が保障されることになった。これによってビハリ・ボースは日本を拠点とした政治・言論活動を公的に堂々と展開することができるようになった。このときビハリ・ボースは、わざわざイギリス大使館に帰化申請のための書類を申し出に出向いており、そのときのことを自叙伝に愉快そうに記している。

蛇の様な執拗さで私をつけ回した英国官憲も、欧州大戦が連合軍の勝利に帰して結末を告げたので、さすがに執拗な英国も、私を「独探」(ドイツのスパイ)の名をもって苦しめることは出来なくなった。そこで、私ははじめて大使館に出頭して、日本に帰化の手続をとった。大使館のものも、私のこの行動には、内心、随分人を喰った奴だと口惜しがったに違いないが、どうすることも出来なかったのは、せめてもの鬱憤晴らしであった。

ラス・ビハリ・ボース著『独立の闘争』昭和書房

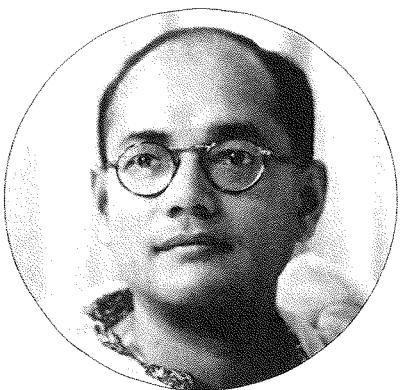
だが、これまでビハリ・ボースを猷身的に支えてきた俊子は、この時期から病気がちとなり、療養の甲斐もなく、一九二五年三月、病のためわずか二八歳で世を去った。隠れ家を転々とする生活のなかで肺を病んだことが原因とされる。わずか七年ほどの結婚生活だったが、ビハリ・ボースは「短かつたけれど我々の生活は幸福であった。一生分の幸福をあの数年の間に受けた」と語り、その後の再婚話などはすべて断っている。

ビハリ・ボースと俊子の結婚生活について、母親の相馬黒光は、風俗習慣の違いによるトラブルなどはほとんどなく、特にビハリ・ボースは日本人の性格や風習をよく理解していたと言う。同時に、俊子も、夫の祖国インドへの敬愛の念や憧憬を深く抱いていた。俊子は臨終の際、夫ビハリ・ボースの声に合わせて、インドの古いお経の経文をかすかに誦していた。黒光は、母親の自分にも決して立ち入ることができない、二人だけの世界がそこにあったと記している。

俊(子)は際立った才能があつて人を惹きつけるというような子ではなかった。ただいかに真実で、そうして無口で意志が強かった。

その信念を、葬儀の場で弔辞を読んだ木下尚江は「笑って断頭台に上る人だ」と語った。これは、俊子の弟も彼女をそう評したことがあったことから「木下さんの眼にも同じ俊子が映っていた。俊子も地下にはほえむであろう」と黒光は、母親として、むしろ雄々しく娘の人生を讃えている。なお、ボースと俊子の息子、正秀は、一九四五年六月、沖繩戦にて戦死しており、彼の英霊は靖国神社に祀られている。

頭山満、相馬夫妻、そして若き人生をビハリ・ボースへの愛と献身に捧げた俊子、そして多くの志士たち、また名もなき中村屋の店員たち、彼らに共通してあったのは、ここ日本で窮地に追い込まれた正義の人物は異民族であろうと守り抜く、そのためにはいかなる権力であれ恐れることなく振る舞うという信念だ。このような人々の思いこそが、日本をアジアのリーダーとし、また、インドをはじめとするアジア諸国の解放のために立ちあがらせたのである。



第四章 受け継がれる「独立」への意志